

東書一上

おおきなかぶ

笠原先生の筆録は、光村の教科書を使ったものでした。東書と光村では、訳者も画家も違っています。絵本として受ける印象も違います。多分、ロシアでもいろいろな絵本になっているのでしよう。

HIS先生は、その点を踏まえて笠原先生のものも修正されています。それが、生きた活用法だと思えます。

HIS先生の案を読ませていただいて浮かんできたことを書きます。

一、この話の眼目は、繰り返し楽しさを味わうことです。イメージの世界で遊ぶ楽しさを体験させたいものです。イメージ（想像・空想）の世界では、人も動物も違いがなくなります。また、植物のかわりもその役割を発揮します。その助けになるような指導を工夫します。それが、笠原先生の略画に表れています。略画はイメージを膨らませる妙薬です。いずみ会では、そんな工夫を楽しんでいます。

二、ご質問の区画についてです。
東書の教科書を見ると、①かぶの種まき、②大きなかぶ、③抜く人④三人と三匹、⑤抜けたに分けられているようにも感じます。光村では、九つに分けられ

ているのが分かります。

そこで、区画をどうするかですが、九、八、七区画が考えられます。学校での今までの取り組みもあるかと思しますので、お任せします。今回の場合は、どう区画しても扱えますが、少し、印象の違いが出そうです。

九区画にすると、九区画目は一行になります。八区画にすると、種からかぶになるまでの時間経過を示せます。七区画は、大きなかぶを抜く面白さに焦点化されます。笠原先生の区画は、そう考えられています。

三、第一次指導で題名を板書します。大きく書きます。書いた題名を手がかりにして概観の指導に入ります。それを「○題目」の扱いといい、題目を解くとか、ほぐすとかいいます。「おおきなかぶ」の場合には、「おおきな」と「かぶ」に分けて考えることもできますね。笠原先生は、「かぶ」から入りました。「かぶを大きくした人は」と関わる人を出しています。それから「かぶ」についての子供の常識を確認しています。これを、生活に落とすといえます。こうして、題目の扱いをしながらこの話の輪郭をはつきりさせます。笠原先生は、かぶの変化、登場人物の数で扱われました。

次に「◎ひびき」の扱いになります。ここが、一番難しいところ。担任が

教材を読んで、自分自身が強く感じたところを扱うのです。（一般的には、主題にあたりますか。いずみ会では、文章の心といっています）文章から響いてくるものですが、心そのものを扱うのではありません。あくまでも響いてくるもの、響きそのものを扱うのです。心を具体的に考えるのは、第二次指導です。笠原先生は、大きなかぶを抜く様子を扱われました。これは、『心』とほとんど重なります。ですから、「いちばん最初に抜こうとした人」「抜けたか」「何人でぬいた」と大枠を示して、「○手引き」へと繋いでいます。

四、手引きに従って、黙読しながら語句を視写します。最初は、皆で一緒に探します。だんだん慣れてきたら、子供たちに任せる量を増やします。子供たちの書いている様子を机間指導しながら確認します。一通り見終えたら、自分の案を板書します。時間配分を考え、発表させて板書することもあります。

最初にかぶを抜いたおじいさんのお手伝いした人を書き出すのですから、抜く人がいない「1」は、○にし、（八区画の場合は、1・2）「2」は、おじいさんと板書してありますから「おばあさん」「まご」と皆で探したら、子供に任せていますね、笠原先生は。

五、四かくが終わったら、机上を片付けます。板書だけを使って学習する時間です。

一よむ（聞く）二とく（考える）Ⅱ学級全体での活動、三よむ（黙読）四かく（視写）Ⅲ個人の活動、五よむ（指黙読・指音読）六とく（考える）七よむ（指音読）Ⅳ学級全体の活動と、大きく三つの活動になります。今流行のモジュール授業になつていると考えてもよいかもしれせん。それは、一時間の授業に変化を持ち込み、集中を切らせない工夫でもありません。ですから、机上を整理することの意味は、大きいのです。イチロー選手のルーティーンではありませんが、お決まりの手順を踏んで気分の転換を図り集中力を高めまます。その意味において、五よむの指導は非常に重要です。指黙読で集中が高まり、指音読（斉読）で張りのある声が出ると、六とくの充実が期待されます。鞭振り八年といひ、一番難しい技です。

六、六とくは、「○事実・区分」「◎山」「○余韻」となっています。笠原先生は、書かれた三人と三匹の関係を扱うのに、なぜこんなに大勢のものが関わったのかを考えさせました。これは、二とくで扱つてもよいのですが、ここに取つて置いたのは、略図の効果をより高める為だろうと思います。この話は、単純な話ですので、どう重なりを工夫するかが指導のポイントです。そうしないと、同じことの繰り返しになってしまい、子供に飽きられてしまいます。集中力を削ぐことにな

ります。指導の種をうまく分散することです。種が尽きたら授業しない方がよいのです。くどいと子供に馬鹿にされてしまいます。やり過ぎるより、やり足りない方を選ぶべきです。足りないのは、子供が自分で補うことにもつながります。

笠原先生の、この扱いにはユーモアもあります。イメージが膨らんで登場人物に同化した子供は、どれだけ力を込めるでしょうか。そういう感覚を持たせるのが余韻のある授業というのだと思います。

七、第二次指導では、題名は板書しません。機械的なことは止めようと、鈴木佑治先生は何時もおつしやつています。これは、すでに子供たちには分かりきつていふことだからです。ノートには、授業の記録という意味もありますが、板書された事項（赤で書き込まれたものも含めて）を写させるためにノートを出させません。時間的にも、余裕がないのですが、六とくで書き込まれたものは、考えを深めるためのものです。余韻のある授業の場合には、家に帰つて自分で書き加えられるようになります。それが可能な単純化された授業を目指しています。

第二次の四かくは、読みの力を育てる技術として小学校の内に体得させたいものです。視写する様子をみてみると、力のある子とない子の差がはつきりします。作文の指導で聴写をしますが、これと組

み合わせることによつてより効果的に力を育てます。英語の学習にも役立ちます。

八、笠原先生の筆録は、担任としての授業ではありません。二時間の持ち時間で何をするかということ。ですから、1の所だけでなく、2の所も、先生が板書を加えて、掛け声の面白さを扱われました。担任ならば、1だけでもよいと思います。第二次第二時で、掛け声の面白さを充分に楽しめるのですから。

そうすると、六とくの扱いがかわりますね。種を蒔くところ、かぶが大きくなつたところを対応させて、より具体的に考えることになります。

先ず「区分」です。まず、おじいさんのこととかぶのところに分けて、前は誰のこと、後は何のこととやるか、おじいさんのこととかぶの二つに分けて、とするかは、学級の状況でよいでしょう。どちらが難しいでしょうか。

次に、おじいさんのところを二区分します。蒔く動作と「願ひごとⅡつぶやき」に二区分させます。

「Ⅰ」の中は、おじいさんが何をしているところですか、と問えば、つぶやいているとか祈つていふとか出るでしょう。その前は、したことですね。何をしましたか。種を蒔きましたと、確認し、傍線を引き、二区分されることを押さえます。

更に、「願い」の「数」を確認します。「①あまい②おおきく」の横に①②と添えます。これで、区分は終わります。

更に、おじいさんとかぶに分けた二つの間には、世話した時間があることも考えさせます。世話の仕方想像させ、水やり・草取り・虫よけなど子供の経験を話させます。

*そうすると、おじいさんのところとかぶのところの間を空けて板書する工夫が必要になります。

その前に、語義がありますが、「とてつもなく」くらいですかね。語義は、難しい言葉はないかなと、先ず問ってからにします。子どもから出ない時には、確認の意味で担任が「とてつもなく」って説明できる人と投げかけるようにします。

九、第二次指導六とくは「○語義・区分」「◎心」「○余韻」となっています。

「◎心」の扱いに入ります。

ここは、この話全体の「心」につながるるところを読み取ることです。私は、この話の字眼(文章の心を表す一言)を「や」と考えました。それにつながる言葉「利き字」といいます。ここでは、その「利き字」に当たるのが「や」と「元を作った」「祈りの言葉」と「育ったかぶ」の様子を表す「おおきな」と「おおきい」となります。「あまい」もありま

す。食べる前から、甘いと分かるのですから、特別な香りがあるのでしようね。この辺は、触れないほうがよいでしょう。そこで、関口先生の案の番号に沿って整理してみます。

*六とく

③二つに分けます。上の区分線を引きながら、前は、誰のこと。

(おじいさん おじいさんに傍線)

後は、何のこと。(かぶ かぶに傍線)

④おじいさんのところを二つに分けま

す。「」は、おじいさんが何をしたら

ろかな。(つぶやいた つー 板書)する

と、前は、何したところ。(たねをまく

たねをまきました、に傍線)

⑤つぶやいたことが二つあるが、どんなことですか。(①あまい ②おおきく)

⑥おじいさんのつぶやきがかぶに届きましたか。(とどいた)

⑦どの言葉で分かるか。(あまいに傍線

とてつもなくおおきに傍線)

⑧あまいかぶになったのには、おじいさんのつぶやきに秘密があります。分かるかな。(あまいあまいに波傍線、かぶのあまいから矢印を引く)

⑨おおきいの方も同様にする。

⑩さらに秘密があるの。世話のときにもおじいさんは「つぶやいたのでは」と投げかけて、答えを求めず余韻とする。

⑪明日は、大きなかぶが抜けたところを考えます。

第二次第二時について考えます。

二とく

○おさらい

①かぶは、おじいさんが心を込めて育てました。どんなかぶに育ったのかな。

(あー とてつもなくー 板書)

②おじいさんは、甘い甘い、大きな大きなかぶになれと、つぶやきました。かぶは、甘い、とてつもなく大きいかぶになりました。更に、プラスアルファに育ちました。それは、何だろうか。

(げんきー 板書)

◎承接

③かぶも、葉っぱも、根っこも元気です。おじいさんがぬこうとしました。どうなりましたか。

(ところが、…… ところが、と板書)

④誰が助けましたか。(おばあさん)二人で引っぱたらどうなりましたか。

(それでも、…… それでも、と板書)

⑤孫も一緒に引くとどうなりましたか。(まだまだ、…… まだまだ、と板書)

⑥犬も加わりましたが、どうなりましたか。(まだまだ、まだまだ……)

まだー、まだーと板書)

⑦猫も手伝いましたが、どうなりましたか。(それでも、…… それでもと板書)

○手引き

かぶが抜けたところを書きます。

六とく

○語義・区分

①難しい言葉はありますか。なければ、確認します。「やっ」とを説明してくれる人はいませんか。

②区分をします。三つに分けます。最初に二つに分けます。かぶとおじいさんたちに分けます。

(区分線とかぶ・おじいさんに傍線)

次に、おじいさんたちのところを二つに分けます。体と声に分けられます。

(ひっぱってに傍線と「」に分ける)

◎心

③かぶがぬけました。みんなの嬉しい気持ち分かるのはこの言葉ですか。

(やっとを赤丸で囲む)

④やっ、と、抜きました。そのときの「うんとこしょ、どっこいしょ」の声は、どうだろうか。では、おじいさん一人で抜きました。「うんとこしょ、……」と「ところが」に続けて何と読むかを確認する)

次は、おばあさんと一緒の所をと、次々に読む位置をずらしながら全員で抜くところへと進める。「うんとこ……」の間と声の大きさを工夫させる。(今回は、完ぺきを求めない)

⑤だんだん力が入ってくるように書かれています。どこにその秘密があるか、分かる人がいたら素晴らしいです。

(「」が「」をひっぱって、が6回も繰り返

されている。韻があり、リズムが生まれる。「が」と「を」赤丸をひっぱって、に傍線)

○ 余韻 私は、鼠の役をやりたいな。(それぞれのイメージで感情移入できていればよい。)

*

いずみ会では、授業の中で「かぶが抜けたときおじいさんの気持ちを考えて、発表させる活動を入れませんか。それは、イメージの世界に浸らせることが大事だと考えるからです。授業中に、それを言語化させようとするのは、生ずるからです。報道番組で、被害者にインタビューする光景が映されますが、酷なことです。今は、心の整理が付いていないのです。ちよつと、大げさな例ですが、それと似ています。真の感動は、時間を置いてから確認するのがよいのです。子供の気持ちになってみると、どう話してよいのか迷うのではないでしょうか。そうであれば通り一遍の話しか出てきません。読書感想文が不人気なのはその点にあるようにも思います。

では、どうするか。私は、第四次指導として感想文の指導を入れることを勧めています。作文の教式の応用です。記述に一時、修正の一時とりまします。先の話と矛盾しているようですが、第三次指導まで済ませて(場合によっては省略)

話の面白さや魅力の濃淡が時間の経過でろ過されてくるからです。今、一番心に残っていることを材料にして書かせます。何が残っているかに個性が出ます。担任が強調しているところが残るとは限りません。どうも、興味関心の向くところは個人差があるようです。そこが、また、人生の面白いところかと思うのですが、学校の方針で、授業の中で登場人物の気持ちを考えさせるといふのなら、その問いを入れるしかないでしょうが、検討してみてください。

七よむ 指音読

指音読後に、暗唱するのがよいでしょう。まず、「ひっぱって」を消して指音読します。次に、「がとを」を残して他を消して指音読します。(ここまでくれば、指音読が指暗唱になります)最後は、句読点だけ残して指音読します。このように、楽しみながら読ませるので、適宜、調整し過ぎてると疲れますので、調整してください。イメージが膨らんでその世界を楽しんでいる雰囲気は大事です。余韻のある授業は、そういうものだと思います。

長々書きましたが、お役に立てたかどうか心配ですが、疑問点は気楽にお話ください。

桐田

〈板書事項〉

あー とてつもなくー げんきー

ところが、

それでも、

まだまだ、

まだー、まだー

それでも

ねずみが

ねこをひっぱって、

ねこが

いぬをひっぱって、

いぬが

まごをひっぱって、

まごが

おばあさんを

ひっぱって、

おばあさんが

おじいさんを

ひっぱって、

おじいさんが

かぶをひっぱって、

「うんとこしよ、

どっこいしょ。」

やっと、かぶはぬけました。

一行の字数を考え、ひっぱって、が横に
並ぶように板書を工夫しました。